

1 亜高山地帯の造林

1 試験担当者

本場造林部造林科長：草下 正夫

〃 〃 造林第二研究室：蜂 屋 欣二，只木良也，根 秋一延

〃 〃 植生研究室：前田 誠三，町 住 昇

〃 土壌調査部土壌第三研究室：宮川 清

〃 防災部気象研究室：岡上正夫，佐々木長歳

東北支庁育林第二研究室：加藤亮助

〃 育林第三研究室：山谷 孝一

〃 経営第四研究室：小島忠三郎

木曾分場造林研究室：飯塚三男

2 試験目的

拡大造林の進展にともない亜高山地帯にも，大面積皆伐人工植栽の施策がすすめられているが，その成績は必ずしも満足すべきものではない。しかも昨今の労働力の不足の問題もからんで，これら地帯における造林技術の再検討と一層の研究が必要となってきた。この研究においては，人工造林あるいは天然更新にかぎることなく，それぞれの環境に応じた最適更新技術の確立を目的とする。

3 昭和42年度の経過とえられた結果

前年度（亜高山地帯の造林，中間報告，昭和42年3月参照）に引続き，次の各項について研究をすすめた。

(1) 八ヶ岳帯状伐採地区の伐後帯処理後における稚樹の消長および植生遷移

（本場担当）

(2) 川上帯状更新試験地の帯状伐採実行後の稚樹の消長および植生遷移

（本場担当）

(3) シラベ単純林の生産増進（根系調査をふくむ）および生長予測

（本場担当）

(4) ブナ更新試験地（六日町菅内苗場国有林）の設定

（本場担当）

(5) 高山性樹種の造林成績調査

(木曾分場担当)

(6) 東北地方の亜高山林およびブナ帯上部に関する調査

(東北支場担当)

中部山岳の亜高山性針葉樹林については、地床の条件さえよければ、20～30m巾の帯状伐採によってダケカンバの侵入を制御してシラベ、アオモリトドマツの更新を助修することができ、かつまた保残荷の処理によって被害を受け消失する稚幼樹数は40%前後にとどめることができるので、充分な全面更新を完了することができよう。

ブナについては太面積皆伐地以外に特殊な伐採方法をとった例が少なく、どの程度の疎開が稚樹の発生成立に適しているかがまったく判っていないので、70、50、30%の伐採率区分と、地床処理別とを組合せた試験地を設定して調査をすすめることとした。(伐採実行は43年度)

また、東北支場では旧ブナ総合試験地内を利用して、ブナの更新に関する各種の調査をすすめた。

4 昭和43年度の試験計画

前年度の調査にもとずいて本年度は更に次の各項について調査研究をすすめる。

(1) 八ヶ岳帯状伐採地区の保残荷および当初更新荷の稚幼樹の経年消長調査

本場(植生、土壌3)

(2) 川上帯状更新試験地の稚幼樹の経年消長調査

本場(植生、土壌3)

(3) コメツガダケカンバ混交林の生産構造および生長予測

本場(造2、植生)

(4) ブナ更新試験地の基礎調査および地床処理伐採

1. 選木

本場(植生、土壌3)

2. 地床群落調査

" (")

3. 微気象調査

本場(気象)

4. 地床処理

前橋局(六日町署)

5. 伐採の実行

" (")

(5) 亜高山性針葉樹林の伐処理試験

木曾分場

(6) 東北地方のブナ更新試験

東北支場(育林2、3)

(7) ブナの更新に関する現地協議会開催

東北支場主催、関係営林局、本場参加

既に設定した試験地はなお稚幼樹が完全に成立した状態ではないので毎年継続的に消長ならびに生育状況の調査をつづける必要がある。

針葉樹林帯の天然更新地はひとまずダケカンバに全面的に占有されるものが多く、これをなるべく針葉樹の混交率の高い林にみちびく技術が重要となる。そこで先づ第1はコメツガとの2種混交林を取上げてその目的解析をこころみようとする。

ブナの更新稚樹の存立要件として稚樹の梅雨時の病害(*Fusarium* sp.)と夏季の乾燥とが考えられ、また地形によっても大差があるので、これらの関係を微気象の調査によってある程度あきらかにしたい。

ブナに関しては既に融雪地帯の造林問題として研究がすすめられて来て、一応の成果もおさめられつつあるので、この融雪地帯協議会を持って、実行面と研究面の意志統一を図ると共に、更に一歩すすめて問題を解決するいと口を得たい。